

第二百六十四話 慟哭の人身御供！

「第百十一話 満蒙開拓団、悲惨な逃避行！」3⑥項に記載した黒川開拓団に関する「ソ連兵へ差し出された娘たち」平井美帆著（集英社）を読んだ。現在進行形の露のウクライナ侵攻でも旧ソ連の体質というかDNAは聊かも変わっていない。非道に過ぎる。人のなせる悪行とは思えぬ。悪魔だ。当該書及びNHKが2017年に放映した[E T V特集 告白 満蒙開拓団の女たち（放送日2017/8/5）]その他を参考に紹介する。

1 黒川開拓団とは

満蒙開拓とは、1932年満州建国以降敗戦までの間、国策により奨励された中国東北部への移民事業である。岐阜県加茂郡黒川村（現・白川町黒川）を中心とした黒川開拓団は、約650人が吉林省陶頼昭に入植していた。



2 悲惨な開拓団の状況

ソ連軍、満州人、匪賊による暴行・略奪・虐殺が頻発し、集団自決も霞城集落、小古洞開拓団、来民開拓団、高田開拓団等数知れず、戦闘に巻き込まれた開拓団もあった。（参照111話）

黒川開拓団の隣組でもある来民開拓団の集団自決に関する報が8月17日もたらされた。

3 黒川開拓団の決心

次は自分たちの番かと団員は恐れ慄いた。開拓団の幹部らは、陶頼昭を脱出するか、留まるかの判断を迫られた。直ちに母国に引揚は困難だろう。新京には日本人も多いので情報もあるだろうし集団移動するか。しかし、母子、老人が大半を占める大集団が徒歩で移動することは厳しいものがある。団から兵隊に出た男たちが戻ってからにすべきだとの意見もあり、結論は、「陶頼昭を動かずに身を守る。」だった。厳しい冬を如何に過ごすか、越冬に向けて穴居造りが始まった。

4 暴徒の大群による襲撃

黒川開拓団が、暴徒の大群に囲まれたのは9月半ばから下旬にかけてだった。開拓団は包囲され、塀の上からソ連鎌の刃先をちらつかせて威嚇された。満人の警察官が説得を試みるも暴徒の数は膨らむばかりであった。

黒川開拓団としては、残りの物資を奪い去られたら、間もなく訪れる零下の世界を生き延びることは出来ない。最後の砦を守るには、陶頼昭駅に進駐しているソ連軍に助けを求めるしかないと決断し、団幹部は、決死の騎馬隊を送り出した。ほどなくして現れたソ連兵を見て暴徒は退散した。

5 一難去ってまた一難

暴民による襲撃は収束したもの、今度は下っ端のソ連兵らによる物取りや手当たり次第の強姦が始まった。進駐したソ連兵らの女漁りは凄まじかった。

6 娘を接待役として

窮した団幹部は、対策を検討した。娘を差し出せばソ連軍司令官に守ってもらえるのではとの意見が出た。他に妙案もなく、ソ連兵との交渉を経て、所謂「接待」システムが作り上げられた。

黒川開拓団は、生き延びるためとは云え、ソ連軍による命の保障と引き換えに、開拓団の未婚女性15人が「性の接待」をするという約束がなされたのだ。接待は、終戦直後の9月頃から11月頃、またはそれ以上、続いた。近隣の開拓団の集団自決が相次ぐ中、結果的には「接待」により、開拓団のうち、およそ450人が帰国を果たす。

7 接待は、秘すべきものとされ、戦後長く、語ることはタブーであった。が、遂に重い口を開いた人々によって、その事実が明るみに出たのである。人身御供にされた娘達、送り出した団幹部等の心中や如何。その実態は到底筆に出来ない。慟哭の極みだ。

（了）